

第2回富山県文化審議会 委員からの主な意見

参考資料 1

(委員は五十音順)

委員名	発言内容
青 柳 委 員	・富山県芸術文化協会が友好提携しているハンガリーのデブレツェン市で日本文化の書の展覧会を行い、約1,000人が集まった。現地の人々の芸術への認識は素晴らしかった。 ・現地で十二単を着て書道パフォーマンスを行い、お琴の演奏とコラボしたところ、大変評判が良く、日本文化に造詣の深い方々が多いことに感動した。そういうことを富山でもできればよい。
伊 東 委 員	・富山で作る文化計画であるため、ふるさと富山の文化の視点はとても大事。 ・単に中央や世界的な素晴らしいものを見る、触れるだけではない。こどもが素晴らしいものを見ることは重要だが、どう見えているかというところからスタートして作品ができ上がっていくので、活動として加わったのはよかった。 ・こどもは可能性を持っており、伸ばすべきなので、こどもの伸びる機会の支援に目を向けてほしい。そういう意味で、アフタースクールが重要。 ・インクルーシブやアーツカウンシル、ユニークベニューなどのカタカナ語はできるだけ分かりやすくしてほしい。 ・アーツカウンシルはどういう人選をして、どういう運営をするか。富山にはよいものがたくさんあるため、それをどう発見するかがとても重要。 ・観光のために文化があるのではない。観光のみに限定するのではなく、幅広い意味合いを持たせてほしい。 ・身近に素晴らしい文化があるので、外からの目で気づかせてほしい。県民が自信を持つ機会や、今後も良いものを担うやりがいを感じさせる機会を作り出すのが観光である。 ・市町村単位の事業に特化して支援するのではなく、広い範囲での交流や活動に目を向けて支援、推進してほしい。
内 山 委 員	・アンケート結果を見ると、若年層の18歳から19歳の人たちのアンケート回答者が4人しかいない。 ・子育て情報誌を作っている中で、お母さん方から「こどもに文化芸術に触れさせたい」、「こどもたちはこういうアート活動が好き」という意見を聞く。 ・10年先を作っていくこどもたちの意見が、このアンケートにどれだけ出ているのかが少し不安。 ・こどももお母さん方も今はSNSなどで簡単にアンケートを取れるので、ぜひ意見はしっかり取っていただけたらよい。
清 原 委 員	・近年は、インクルーシブやまちづくり、地域活性化に文化を活用する例が増えている。 ・これまでは文化振興自体は目的だったが、社会の活性化や役立てるために文化を利用することが増えているのではないか。 ・他県のアーツカウンシルでは、従来の文化振興に加え、社会に貢献するような文化振興の取組みを取り入れていく動きもあるため、今後、アーツカウンシルについて検討するのであれば、そういったものを取り入れてもよいのではないか。
佐 部 利 委 員	・まちなかを活かすなど、色々な場所が文化芸術活動を行う場所になりうるという視点がある。 ・美術館はデザインをキーワードにしており、切り口が大変広い。その切り口を大事にしながら、小学校から大学まで利用頻度を上げていく。まず、こどもが興味を持ち、お父さんやお母さんに話をして文化が広がる。 ・助成金も必要だが、助成金がなくなると活動ができないということではなく、自分の団体で生み出すことができればよい。 ・各地のアーツカウンシルを視察したことがあるが、良い面も悪い面もある。何がやりたいかを明確にした上で考えるべき。 ・やりたいことが明確になっており、具体的なイメージがあり、それを実現できる組織がアーツカウンシルである。 ・外国人や障害のある人を含めて、いろいろな人が入ってきて、交流や繋がりが出てくるとよい。それを企業がタイアップする形で繋がっていくとよい。 ・中高生などアートが好きな人がいろいろな場所で表現できる場を考えた時に、富山県美術館や水墨美術館などの今ある施設をうまく連携できればよい。

第2回富山県文化審議会 委員からの主な意見

参考資料 1

(委員は五十音順)

委員名	発言内容
砂 原 委 員	・観光面でいうと、コロナ前はアジアからのお客様が主だったが、最近は欧米・豪州等からの旅行者が増加している。欧米市場での県のプロモーションや、NYタイムズに「行くべき所」として取り上げられたことなどが背景にある。 ・単にアルペンルート等の自然景観を楽しむだけではなく、「おわら風の盆」等の祭りや、高岡銅器等の工芸品などの伝統文化を体験したり、「富山湾鮎」等の食の魅力を味わったりするなど、多様化している。 ・アンケートの対象は18歳以上だが、将来を担う中高生の若い方がどのように考えているか、もう少し取り入れたらよいのではないか。 ・若い人が文化イベントを見に来れば、また若い人たちが参加しようと思うので、そういう面で学校教育の協力も大事ではないかと感じた。
武 内 委 員	・根本は誰のため、何のため、なぜという観点が一番のポイントではないか。 ・「文化芸術」の定義は非常に難しい。結果的に文化芸術になったということかもしれない。 ・文化芸術に関わることで自分たちらしさを表現できることや、自分の中の幸せの感覚が上がるのが、文化や芸術に繋がっている。 ・文化芸術をするから豊かになるというより、やったことの結果が文化芸術と評価されている方が大きい。 ・いろいろなライフスタイルの変化や価値観の変化によって、義務感や継承することありきになりすぎて、実際に関わる人達の思いや考え方と多少ずれが生じている。 ・なぜ文化芸術が必要とされるのかという点について、もっと柔軟な見方をしていく必要があるのではないか。 ・アーツカウンシルについて、助成金を差し出すことが目的ではなくて、自分たちでそれを工面する手段を一緒になって考え、企業と結びつけるなどの方が重要である。 ・アーツカウンシルに関わる理由の一つとして、お膳立てをしてあげることではなく、どういう風に意識を向けてあげるかという点も非常に重要ではないか。
長 澤 委 員	・「文化芸術」と「芸術文化」は違う。この審議会で検討していくのは芸術、という風に我々の固定感が少し変わってきている。 ・アンケートの回答者も、「文化芸術」という言葉の定義が分からないくらい、定義が広がりを持っている。芸術というくくりをどのように捉えて、5年後、10年後に富山県が支援していくかという点が答申をまとめるにあたって重要なポイントになる。 ・価値合理性と目的合理性を分けて考え、くっつけることが必要だが、それらを整理するのが非常に難しい時代になっている。 ・文化は創造できないもの。文化は、なくなったときに寂しくなったと思うような価値観。 ・人間が文化を作るのではなく、文化になるかもしれないものを作ろうとすることができる。これは職場でも、芸術でも、食文化でも、起こりえること。 ・行政は縦割りで予算がついて所管するやり方になっているが、芸術系において世界中で注目されているのは横串を刺すクリエイティブなやり方。 ・今までのように一つの形式化されたものを作ったらこうなるというやり方が成り立たないところに差しかかっている。 ・必ずしも美術館やギャラリーで作品を見せなくても、カフェの横でコンサートをするなど、いろいろなところで何かをやっている。富山は先駆けていろいろなことをやっているが、県民がそれを知らないというのはまずい。 ・アーツカウンシルという専門性の高い塊、大きな傘があればよいのではないか。大きく広げないとカバーできない。みんなが雨に濡れないように、大きな傘を作らないとウェルビーイング向上はなかなか難しいのではないか。 ・県という大きなエリアで情報をシェアできるような、大きな「富山県傘」を作りたいことをアーツカウンシルと言っているが、そういうものが必要だと感じた。 ・助成金がほしいということではなく、サイトを見るとどこでどんなことをしているのかわかるような文化サイトを県に設置してほしい。
西 島 委 員	・毎年富山県では、10、11月頃に富山県高等学校文化祭を行っており、推薦される専門部もあれば、競うことで代表を決めて、次年度の全国大会に出場することもある。 ・一部は県からの補助、生徒や高等学校文化連盟の会費等で実施しているが、全国でも協賛が集まらず、それぞれが最低限のラインで行っている。 ・高等学校文化祭のステージ発表では、八尾高校郷土芸能部が「おわら」、南砺平高校郷土芸能部が「むぎや」を行っている。大会当日の発表だけではなく、生徒たちが力を入れて、地域の方々の力を借りて取り組んでいる経緯を知ってもらうことで、県民の方により興味を示してもらいたい。